

Sex.ファディウス・セクンドゥス・ムーサ

—ナルボンヌの都市皇帝礼拝祭司—

山本晴樹

元首政最盛期の元老院属州ナルボネンシスの首都ナルボ（現ナルボンヌ）における都市皇帝礼拝祭司として有名なSex.ファディウス・セクンドゥス・ムーサ（Fadius Secundus Musa）については、これまで数多く言及されてきている。しかし、最近の碑文研究の進展により、彼の都市皇帝礼拝祭司としての存在に関して、あらためて考察しなければならない問題がいくつか出てきているように思われる。本稿では、彼に関する碑文（CIL XII,4393）を手がかりに、その問題を取り上げてみたい。

ここで取り上げる碑文は、1826年、ナルボンヌの中心部に位置し、かつての南北の中心軸線（カルドー・マクシムス）であったと思われる現ドロワット通り（rue Droite）で見つかった台石の表面に彫られたものである。かつては台石の上に彫像が置かれていた。その正面と左側面に碑文が施されている。まずわれわれの問題に直接関係する正面碑文を検討してみよう。

1. 正面碑文

1888年O.ヒルシュフェルト編纂の『ラテン碑文集成（CIL）』第12巻4393番によれば、正面碑文は以下のとおりである（碑文中の小文字はヒルシュフェルトの補読）。

《SEX・FADIO・Pap / SECVNDO MVsae / OMNIBVS・HONorib / IN COLONIA・Narbo / NENSi fuNCTO ... / PRIMO / NOVI・NARBOne / FABRI・SVB・AEDIAni / NARBONENSES / PATRONO・OB・MERITA / EIVS / L・D・D・D》

「パ（ピリア・トリブス所属の）Sex.ファディウス・セクンドゥス・ムー（サ）へ。植民市ナルボで全ての公職を歴任。ナルボの新しい（ ）の最初の（ ）。ナルボの職人組合がパトロヌスのために、彼の功績の故に（これを建てた）。都市参事会決議によって与えられた場所。」

この碑文はH.デッサウ編纂（1892-1916年）の『ラテン碑文選集（ILS）』7259番では以下のよう

《Sex. Fadio P[ap.] / Secundo Mu[sae] / omnibus ho[norib.] / in colonia N[arbo]/nens[i fu]ncto, [flam.] / primo [Aug. templi] / novi Narbo[ne], / fabri subaedia[ni] / Narbonenses / patrono ob

merita / eius. / L. d. d. d.》

「パ（ピリア・トリブス所属の）Sex.ファディウス・セクンドゥス・ムー（サ）へ。植民市ナルボで全ての公職を歴任。ナルボの新しい [アウグストゥス神殿] の最初の [祭司]。ナルボの職人がパトローヌスのために、彼の功績の故に（これを建てた）。都市参事会決議によって与えられた場所。」

ここで問題となるのは、碑文5行目末から6行目にかけての《... / PRIMO /NOVI NARBO》の箇所である。ヒルシュフェルトが空白に置いたところを、デッサウは以下のように補っている。《[flam.]/ primo [Aug. templi] / novi Narbo[ne]》すなわち「ナルボの新しい [アウグストゥス神殿] の最初の [祭司]」である。デッサウはここに、ナルボンヌに新しく建てられたアウグストゥスのための神殿の祭司の創設を見たわけである。

この神殿に関してであるが、建設時期は、一般にこの碑文の左側面の碑文（後述）に149年の日付がみえるところから、2世紀半ばと推定されてきた。すなわちアントニヌス・ピウス期である。帝は周知のように、ナルボンヌを襲った145年の大火によって崩壊した都市の諸施設を修復したことで知られている⁽²⁾。この神殿もその際、帝によって建て直されたと理解された。

とするとこの祭司はナルボンヌの中心部に新たに建設された都市皇帝礼拝神殿の祭司ということになる。これまで、フォーラムに接し、都市皇帝礼拝の場であるカピトリウム神殿の存在は知られている⁽³⁾。とすれば、この従来知られている神殿と、この新しい神殿とは同一のものであるのか、あるいは別のものであるのかという問題が生じてくる（後述）。

1981年に出版されたナルボンヌの古代史に関する著作のなかで、M.ゲローは問題の箇所を次のように補っている（p.367）。

《[flam(en)] primus [templi] novi Narbone》

「ナルボの新しい[神殿]の最初の[祭司]」

すなわち、デッサウが《[Aug. templi]》「アウグストゥスの神殿」とした箇所を、ゲローは単に《[templi]》と読み、アウグストゥスに特定されない神殿ととらえた。というのも、左側面碑文中では同神殿は単に《aedes》と記されており、特定はされていないからである。そしてこの箇所を《[templi divi Aug(usti)]》「神皇アウグストゥスの神殿」、あるいは《[templi Aug(usti)]》「アウグストゥスの神殿」と解説する説を、いずれも空白部を埋めるには字数が長すぎるとしてしりぞけている（p.367 n.370）。

ゲローによれば（p.367）、この神殿はハドリアヌス帝が121年にこの属州を通過した際、建設を

決定したカピトリウム神殿で、明らかに皇帝礼拝のための神殿であり、それが完成したのは132年であった⁽⁴⁾。

すなわち、ナルボンヌには元来、地下貯蔵庫 (horreum) の近くに都市皇帝礼拝神殿があり、ここでは神皇アウグストゥス (Divus Augustus) が祀られていた。その後、2世紀になり、ハドリアヌス帝がこの地を訪れたとき、彼の宗教政策によって皇帝礼拝の強化が行われ、そのための神殿が126年から132年の間に、新たに中央広場 (forum) に接して建設された。これが新しい都市皇帝礼拝神殿である (p.272)。従って、ゲローの説からすれば、現在かつてのフォルムの一部といわれているビスタン広場の近くに建設されたのは、この後者の神殿ということになる。

それでは最初の神殿は現在のどの位置にあったのであろうか。前述のように、一般にはこの都市皇帝礼拝神殿は145年の大火で焼け落ちたために、新しい神殿がそれに代わるものとして建立された、という理解がされてきた。しかし、ゲローによれば、実際にはナルボンヌの大火は市域の北部と東部に集中し、中心部は火災の被害から免れたということである⁽⁵⁾。そうであれば、大火以後も horreum 近くの本래の都市皇帝礼拝神殿は存続したということになる⁽⁶⁾。

以上、ヒルシュフェルトからゲローまでの解釈をみてきたわけであるが、これに対して新しい解釈の可能性を提起したのがD.フィッシュウィックである。彼は当該箇所を以下のように補う⁽⁷⁾。

《[curat (or)] primus [templi] novi Narbone》

「ナルボの新しい[神殿]の最初の[管理官]」

すなわちこれまで一様に《[flam (en)]》「祭司」と理解されてきた箇所を、フィッシュウィックは《[curat (or)]》「管理官」と解釈するわけである。というのも彼は一般に《flamen》のあとに《templi》が続く事例が見られないことを理由に挙げ、むしろ《templi》の前には《curator》を補うほうが妥当と指摘している。事実《curator templi》という表現は、ベジエ出土の碑文に存在する⁽⁸⁾。

つまり先にみたように、ハドリアヌスはナルボンヌを通過した際 (121年)、新しい皇帝礼拝のための神殿を建設することを決定したわけであるが、その建設に関わる管理を担当したのがファディウス・セクンドゥスであったということである⁽⁹⁾。

ファディウス・セクンドゥスはまたその新しい神殿の建設費用を引き受けたようにも思われる。というのも後にみる左側面碑文からも明らかなように、彼は資産家として現れているからである。それに関して興味深いのは、彼の名前の彫られたヒスパニア産アムフォラの断片がローマのモンテ・テスタッチオで発見されていることである⁽¹⁰⁾。その断片の中にはコンスル年が知られるものあり、149年という日付が読みとれる。この年は奇しくも、左側面碑文に彼の手紙の写し (exemplum) が彫られた年であった⁽¹¹⁾。

ファディウス・セクンドゥスがハドリアヌス帝によって建立された新しい神殿のflamenであるのか、あるいはcuratorであるのか、は正面碑文からは判断できない。この問題を解く手がかりとして左側面碑文がある。以下その碑文の分析を試みてみよう。

2.左側面碑文

左側面の碑文はデッサウによれば以下のとおりである⁽¹²⁾。

《exemplum epistulae / Sex. Fadi Pap. Secundi Musae / in verba infra scribta / [Fadi]us Secundus collegio fabrum Narbonesium salutem.》

「パピリア・トリプス所属のSex.ファデウス・セクンドゥス・ムーサの手紙の写しは以下のごとし。[ファディ]ウス・セクンドゥスがナルボの職人組合に挨拶を(送る)。」

ゲローは4行目のファディウス・セクンドゥスという名前に「ムーサ」が欠けており、以下それが繰り返されていること、および父親の名前を欠いていることに注目して、この人物が「ムーサ」というギリシア風の名前を欠落させることによって、自己の卑賤の出（解放奴隷）を目立たなくさせたのではないかと指摘している⁽¹³⁾。

《Plurimis et adsiduis erga me meritis vestris referre grtatiam / [quam]quam difficile est, quo tamen amoris vestro gratissimum sciam / [fore] modo largitionis, inter liberos et clarissimum nepotem Iucundum / [seste]rtia sedecem millia nummum V k. Maias primas die natali meo / [ar]cae vestrae inferam eaque die usuras totius anni computatas / [ass]e octono pernumerabo.》

「わたしに対する汝らの幾多の絶えざる恩顧に感謝を捧げること、それは困難ではあるが、しかし汝らのその親愛に対して最大限の感謝をわたしは感じる。そして恩恵付与として、子供たちおよび最高の貴顕である孫ユークンドゥスとの間で、セステルティウス価1万6千枚を、私の誕生日である5月の最初の日より5日前の日（4月27日）に、汝らの金庫へもたらすであろう。そしてわたしはその日に、計算される1年全体の利子を8アスで支払うであろう。」

ここではファディウス・セクンドゥスがパトローヌスとして、自分の一族とともに、自己の誕生日である4月27日に、1万6千セステルティウスという多額の献金をクリエンスである職人組合へ行っている。彼の資産家としての側面が如実に知られる箇所である。

《Quo vel gratius sit munusculum meum / [porro] / a pietate vestra peto, ut usuras eius summae ea die / [hones]tissimo habitu interpraesentes et epulantes in perpetuum / [divi]datis, neque ea summa ullum alium usum convertatur, / [cum et] ha[c] epistula caveamet deinceps tabulis meis cauturus / [sim, ut] si condicio [supra scripta?] mutata velomissa fuerit, / [ea pequnia ad. . . pe]rtineat vel si in petenda pequnia / [ii diff]erant, ad fiscum maximi principis. 》

「あるいは私のささやかな贈り物がよりいっそう好ましくなるように、汝らの忠義に対して以下のことを要請する。すなわち汝らはその全体の利子をその日に、最も名誉ある服装をして、参会者と会食者に永遠に与えるであろうことを。そしてその金額は他のなんらの利用に当てられないように、私は以下のことをこの手紙で警告するであろうし、またさらにまたそれはわたしの青銅板によって警告されるであろう。すなわちもし上述 (?) の条件が変えられるか違反されるかしたならば、その金は. . . のものになるであろうことを。あるいはもし彼らが金を請求することにおいて遅延するならば、それは至高の元首の金庫のものになるであろうことを。」

ここで問題になるのは後半の空白箇所であるが、ここを、HGL XV, 44はその訳として *la confrérie augustale* (アウグストゥス同志団) を補っている⁽¹⁴⁾。これに対して、ゲローは、その空白箇所を《[ea pequnia ad Augustales? per]tineat》と補い、「アウグスターレース？」のものになると解釈している⁽¹⁵⁾。もしこの空白箇所がアウグスターレースであるならば、同じ皇帝礼拝を担う一方は公的な都市皇帝礼拝祭司と、他方は私的な役職であるアウグスターレースとの結びつきを示すことになり、きわめて興味深い事例である。

《[hanc vo]luntatem meam, si modo probaveritis, et vestram / [adsen]sionem uti aereae tabulae inscalptam ante aedem / proponatis et in basi statuae quam mihi posuistis / [latere de]xtra scribatis, impensissime peto, / [quo cer]tior futurae observationis in desiderio meo probatio sit. 》

「もし汝が私の意思を承認し、青銅板によって神殿の前に彫り込まれるという汝の同意を. . . . 汝が提示するであろうならば、さらに汝がわたしのために設置するであろう彫像の台石の右側面に汝が記すであろうならば、わたしは切に以下のことを要望する。すなわちそれが私の望みにおいて将来の実行のより確実な証拠とならんことを。」

現在残っている台石の左側面には碑文が彫り込まれているので、ここの表現からすれば、台石の右側面には、ファディウス・セクンドゥスの手紙の写しの青銅板がはめ込まれていたことになる

⁽¹⁶⁾。

《[deinde?] manu Fadii Secundi subnotatum erat: / [acta i]ta e mandato. Scribsi kalendis Octoribus Orfito et / [Prisco]los. Epistulam pro perfecto instrumento retinebitis. / [Val]ere vos cupio, domini optimi et karissimi mihi. 》

「それから、以下のことがファディウス・セクンドゥスの手によって記された。委任によってなされたことは以下のごとし。わたしはオルフィトゥスとプリスクスがコンスルの時（149年）10月の1日に記した。汝らはその手紙を完璧な手段によって保持すべし。わたしにとって最善にして最愛の主よ、私は汝らが健全であることを望む。」

先にみたように、ここに記されている149年と奇しくも同じ年のものとされる、ファディウス・セクンドゥス銘のヒスパニア産アムフォラの断片がローマのモンテ・テストッチオで発見されている。これに関して、M.ロストフチェフは、モンテ・テストッチオで発見されるアムフォラの碑文が、国家の統制のもとで働いている廻船業者について語っているという事実から、国家により承認された廻船業者の組合の半公的性格を指摘している⁽¹⁷⁾。したがって、ファディウス・セクンドゥスもナルボンヌの単なる廻船業者ではなく、ローマ当局の公認をうけ、都市ナルボンヌを代表する業者とみなされていたといえるだろう。

《[Huius liber]alitatatis in perpetuum conservandae et / [celebr]andae gratia fabri subaediani Narboneses / [exemplum cu]m tablua aerea conlatum ante aede loco / [celeberr]imo ponendum censuerunt.》

「この永久に保存さるべきそして祝福さるべき気前の良さへの感謝をナルボの職人たちはその写しが青銅板でもたらされ、神殿の前の最も知られている場所に置かれることを決議した。」

ここでは、ファディウス・セクンドゥスの記念碑が「神殿の前の最も知られている場所」（ante aede loco / [celeberr]imo）という、ナルボンヌの中枢部で顕彰されている事実から、彼がナルボンヌを代表する人物であったことをうかがい知ることができる。

結びに代えて

以上正面碑文および左側面碑文の検討をおこなってきたが、ファディウス・セクンドゥスの役職に関して、明確な結論は見いだしえなかった。彼が従来の説のように **flamen** であるのか、あるいは

は新たな説として *curator* であるのかは、にわかには判断できない。あるいは、彼がこの新しい神殿建設の管理を担う役職 (*curator*) に就き、その建設に資金的な援助をも行ったが故に、最初の祭司 (*flamen*) に任じられたとする解釈も可能かもしれない。しかしながらそれを確証する手ごかりは現在のところみつかってはいない。

いずれにせよ今後とらるべき作業は、ナルボンヌの新しい神殿そのものの性格に関する研究、その初代都市皇帝礼拝祭司としてのファディウス・セクンドゥスに関する碑文の分析、そして彼の廻船業者としての存在の解明であろう。

註

- (1) 幅64cm、奥行63cm、高さ167cmの石碑である。碑文の写真版は以下を参照。Cf. M. Gayraud, *Narbonne antique*, Paris, 1981, p.341 fig.54 (正面碑文), p.493 fig.59 (左側面碑文)。
- (2) CIL XII, 4342. Cf. SHA, Antoninus Pius, 9, 2.
- (3) V.Perret, Le Capitole de Narbonne, dans *Gallia* 14, 1, 1956, p. 1-22.
- (4) M.Gayraud, *op.cit.*, p.270-272.ゲローによれば、この神殿は本来はユピテル神殿として建立されたが、皇帝礼拝の神殿としての役割ももっていた。というのも、ハドリアヌスはガリア滞在時にルグドゥヌム(現リヨン)で、ヒスパニア滞在時にはタラコ(現タラゴーナ)で、同種の神殿を建立あるいは修復しているからである。
- (5) M.Gayraud, *op. cit.*, p.266. Cf. D. Fishwick, *The Imperial Cult in the Latin West*, Leiden / New York / Köln, I, 2 (1987) p.252.
- (6) とすると、それにともなって以前のフォルムというのは、現在考えられているよりももう少し西側にずれることになるのではなかろうか。また、南北の中心軸線(カルドー・マクシムス)のあととみなされているドロワット通り (*rue Droite*) はハドリアヌス期からのもので、それ以前の中心軸はそれを西方向へ平行移動させたところにあったのではなかろうか。現在の通りでいえば *rue Lieut. Col. Deymes* および *rue du Capitole* ということになるであろう。ちなみにゲローはこれらの通りが前118年植民当時のカルドー・マクシムスであったとしている。Cf. M. Gayraud, *L'apogée d'une capitale provinciale (1^{er}-2^e siècle)*, dans J. Michaud et A. Cabanis (ed.), *Histoire de Narbonne*, Toulouse, 1988, p.57.なお現在のナルボンヌの市街地図についてはM. Gayraud, *op. cit.*, p.289 fig.46参照。
- (7) D. Fichwick, *op.cit.*, p.254. 最近発刊された *Carte Archéologique de la Gaule*, 11/1 (2002) p.427によれば、既にHGL XV,44において、《[*curart[ori]*]》と解読されているが、しかしそのフランス語訳は“*flamine*”(「祭司」)である。

- (8) AE 1951,62. Cf. Pflaum, *Les fastes de la province de Narbonnaise*, Paris, 1978, p.208, no. 6.
- (9) 南仏コート・ダジュールのサン・トロペ沖合から引き上げられた9個のカラーラ産大理石の太鼓石は直径が1,8mもあり、おそらくナルボンヌのカピトリウム神殿建設に用いられるために運搬の途中難破して海中に沈んだものと推定されている。この巨大な太鼓石の運搬を担当したのがナルボンヌの廻船業者 Sex.ファディウス・セクンドゥス・ムーサではなかったかという説は、魅力的ではあるが推測の域をでない。Cf.V.Perret,*op.cit.*, p. 1 f.;D. Fishwick, *op.cit.*,p.254.
- (10) CIL XV, 3863-3873.
- (11) 馬場典明氏の研究によれば149年は154年とならんで、ヒスパニア産アムフォラがローマに爆発的ともいえるほど大量に輸入された年でもあった。同氏「1-3世紀のイタリアにおけるヒスパニア産アムフォラ —その進出と展開の諸相—」『西洋史学論集』第24輯（1986年12月）1-19頁。特に8頁および9頁の事例洗い出しと表IV参照。この149年および154年を含む150年前後のローマでの事態が何を意味するのかという問題について、筆者はまだ解答の用意ができていない。
- (12) 先にあげた正面碑文のようにまずヒルシュフェルト編纂の碑文（CIL XII, 4393）を検討すべきであるが、ここでは解読よりも内容自体が問題となるので、既に解読されたデッサウ編纂の碑文（ILS 7259）を検討することにしたい。
- (13) M. Gayraud, *op. cit.*, p. 342.ゲローとは別な立場をとるのが、J.Cels,Un problème controversé: l'origine d'un flamine de Narbonnaise,Sextus Fadius Secundus Musa, dans *Eos LXVI* 1978,p.107-121.
- (14) CAG 11/1,223.
- (15) M.Gayraud, *op. cit.*, p.496 n.133.先に挙げたJ.Celsもこの箇所を《[ea pecunia ad Augustales per]tineat》と補っている(*op. cit.*,p.110)。
- (16) CAG 11/1 223 (fig.526 a.b). 右側面の青銅板は現在残っていない。
- (17) M.Rostovtzeff, *The Social and Economic History of the Roman Empire*, London, 1957, vol. 2, p.607.

Sex. Fadius Secundus Musa

Premier flamine municipal ou curateur du nouveau temple

Jusqu'à présent Sex. Fadius Secundus Musa est considéré comme le premier flamine municipal du nouveau temple d'Auguste à Narbonne, que l'Empereur Hadrien a fait construire pour le culte impérial de son séjour en Narbonnaise. Mais récemment D. Fishwick a tenu Fadius Secundus pour curateur de ce nouveau temple, parce qu'il était grand négociant en vin de Narbonne. Il est vrai qu'il y a quelques amphores hispanique à Monte Testaccio à Rome, qui ont été envoyées par Fadius Secundus. Mais était-il flamine municipal ou bien curateur du nouveau temple? Il me semble que Fadius Secundus a aidé à construire ce temple-là à titre de curateur, et grâce à cela il a été nommé premier flamine municipal de ce nouveau temple: il a donc été successivement l'un et l'autre.

YAMAMOTO Haruki

Université de Beppu (Japon)